
情報堂事件簿～暴力団と文学少女～

真昼かえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

情報堂事件簿～暴力団と文学少女～

【NZコード】

NZ3949N

【作者名】

真昼かえる

【あらすじ】

東京某所郊外の自然に囲まれた場所にひっそり佇む館、「情報堂」。

その館には、情報を使役して商売をしている情報屋達が住んでいた。人探しから裏世界の諜報まで、情報を使って依頼をこなすその姿は、探偵や何でも屋などと思われることが多い。

これはそんな情報屋達の事件簿であり、物語である。

プロローグ1

十一月五日 午前六時二十分 東京某所「情報堂」ナナセの部屋
茶色を基調とした、アンティークな一室。一人用のベットと、デスク。
窓からは、東京といふことを忘れさせるような、自然の樹林が広が
っている。

座っているだけで落ち着くこの空間で、平日の早朝に独りパソコン
に向かっている様子は、一般人が見たらどう思うのだろうか。
引きこもり・・・確かにそう見えなくもない。

僕は今年で十七歳だが、高校には行かず就職したので、学校へは通
っていない。

就職した理由は・・・あまり話したいものではない。
ただ、ここ・・・「情報堂」のオーナーが雇ってくれると言った。
僕にここを紹介した人が、必要としてくれたから、ここにいる。
情報堂とは簡単に言うと、「情報屋」の事で、幅広く情報を売る商売
をしている。

最近じゃあ、探偵か何かと勘違いされて、暴力団の私情にも首を突
っ込まれているのだが。

引きこもりに見えるかもしないこの姿、僕からしたら仕事中だ。
この仕事は面白いし、なにより僕にあつた物を受注できる。
やりがいもあるし、スリルとか、緊張感とか、他では味わえない物
を味わえる。

今日も、そんな楽しい仕事をできると思った、その時。
こげ茶色の木製ドアの金色のドアノブが、ガチャリと音を立てた。

ノックもせず、ズカズカと部屋に入ってきたのは、頭じゅう寝癖だらけで、大きな瞳を眠そうに擦る少年だ。

少年は一度欠伸をした後に、眠そうな口調で言つ。

「ナナセ、ボスが呼んでるよ」

「…ノックくらいして下さいよ…」

僕がそう注意するが、少年はもう一度欠伸して、聞くそぶりも見せない。

この少年はキュウ。

パツと見小学生の女の子のようだが、本人は男子中学生だと言い張るから、言及はしない。

義務教育の中にいるが、学校へは僕と同じで通つてないらしい。学校では不登校扱いになつてているのだろうか？

というか、そもそも両親はどうしているのだろうか。

キュウもここに住み込んで働いているが、探してたりはしないのだろうか。

キュウと知り合つて数ヶ月、同じ屋根の下で生活を共にしているが、お互いの素性や過去、家族構成、把握しているものは殆どない。ここには他にも住み込んで働いている人がいるが、皆多くを語りたがらない。

「ていうか、こんな朝早くから仕事かよ。」

唐突に、キュウがパソコンの画面を覗き込んできた。

「あ、いや、最近依頼が多くて、たくさんの人と関わりができたので、データにしてまとめてるんです。」

そう言いながら、僕はパソコンを操作してひとつつのファイルを開いた。

数枚の隠し撮りした写真と、名前、年齢、学歴、出身など、様々なデータが入力されたファイルだ。

「例えば、この人。島田秀樹二十九歳。今は小さい組織のボスですけど、いつかお得意様になつてくれる気がするので、こうやって聞き出した情報をまとめておいでるんですよ。」

キュウは、画面から目を離さないまま、暫く読んでから、僕のほうに向き直った。

「すごいデータだね。さすが、ナナセ。ま、ある意味ストーキング行為だけね。」

そう言って笑いながら、もう一度データに目を通してから顔を上げた。

「じゃ、俺他のやつ等も呼びに行くから、先に会議室 行ってね~」

ドアを開けながらそう言い、部屋を出て行ったキュウは、足早に階段を下りていった。

キュウを見送った僕は、データの整理をキリのいいところで保存し、会議室に向かった。

早朝に会議室に呼ばれる理由は主に 依頼の伝達だ。
オーナーの元へ来た、様々な依頼をジャンルごとに仕分け、適切なメンバーに伝達する。

僕が受けるのは、小さな暴力団や組織といった、裏の世界での小さな揉め事の緩和や 組織の調査など。

基本は個人で動いて依頼をこなすが、大きな依頼はチームで動くことが多い。

チーム活動での僕の役目は、情報の整理と次の行動の指示だ。
さつきキュウは、「他のやつ等も呼びに行く」と言っていた。
つまり、今回はチームで動く、大きな依頼ということだ。
これは、大きなスリルが味わえるかもしない。

プロローグ2

同日午前六時三十分 情報堂会議室

「あ。おはよー、ナナセくん。」

会議室の重い扉を押し開け、期待を膨らませていた僕の耳に、平和の象徴とも言ひべき、間延びした声が聞こえてきた。

「おはようございます、ヨツバさん。」

声の主はヨツバさん。半円の形をした長いテーブルの中の真ん中あたりに着席している。

彼も、この情報堂で働くメンバーの一人だ。
彼がここにいるということは、今回の依頼にあたるのだろうか。
だとしたら、この依頼、相当なスリルを味わえそうだ。

「ボスはまだみたいですね。」

胸の中で沸騰寸前まで高まっている期待を隠すように、僕は言った。
そして、半円卓の中心・・・丁度、全ての席を見渡せる位置にある、
白いデスクに目をやる。

それは、茶色でアンティークにまとめられているこの部屋で、一際
白く、神々しくも見える。

「まだ全員集まってないしー、重役出勤かなー。」

そう言いながら、ヨツバさんはテーブルに突っ伏した。

こうして見ると、隙ありまくりのヘタレにみえるが、自分の素顔を
隠す仮面の様にみえなくもない。

ヨツバさんは情報堂のメンバーの中でも特に素性がわからない。

僕が彼について語るとするならば、かなりの美形、若い男性、細身、そのくらいじゃないだろ？か。黒い髪はどこか人工物を思わせる色だ。染め直したのか。

しかし、彼にはその色が恐ろしいほどよく似合っている。いつもヘラヘラしていて、考えていることもよくわからない、掴めない人。

敵には回したくないが、味方だと心強い。

「でもー、今日はなんのようかなー？」

そういうて、また笑つた。

「さあ、新しい依頼とかでしきうか？」

「それにしては、対応が豪華だよねー」

対応が、豪華。そんな言い回しするのは、彼ぐらいだろ？と思う。これも彼の仮面のひとつかもしれないと思つと、なぜだか心が高ぶる。

「どうこいつことですか？」

僕にはまだその仮面の意味がわからないので、意味を問う。すると、彼は楽しそうに、無邪気に笑いながら答えた。

「今まで、全員が召集された依頼なんてないでしょー。」

「え！？全員召集されてるんですか？」

一瞬、嘘なんじゃないかと思ったが、そんなことをしても何の得もない。

今まで、いくつもの依頼をこなしてきたが、大きな依頼でも、多くて五人編成での受諾だった。

僕よりも長くここで働いているヨツバさんにも初めてだというのだから、なにか相当な事件なのか？なるほど、確かに、豪華な対応・・・だ。

「まだ来ていなければ、その「うちキヨウちゃんが、みんなを呼んでくるんじゃないかな~。」

そう言った直後、会議室のドアの向い側から、なにやら呑音が聞こえてきた。

「なんか、わくわくするよねー」

その言葉に、心の中で同意しながらも、それを見せまいと必死に表情を作り、

「変なことじやなけばいいですけどね。」

そう言って、「フ」と書かれた透明なフレームが置かれた、自分の席に座った。

暫くすると、会議室のドアがゆっくりと開いて、ほかのメンバーが入ってくる。

本当に全員召集されている事を感じると、胸の中の期待は最高潮まで達した。

「あ、ナナセくん。おはよ。」

突然話しかけてきたのは、今入ってきたイツキリさんだった。

彼女はメンバーの中でも数少ない女性だ。

茶色のショートボブと、大きな目、小さな鼻と口は、どこかウサギを思わせる。

第一印象では十八歳くらいに思っていたが、二二歳だという。

「おはようございます、イツキリさんも召集されてたんですね。」

情報収集を専門とするイツキリさんは自ら依頼に当たることほんとなく、各方面で情報を収集し、僕らに提供している。

時たま、僕らでも知らないような情報を仕入れてくれるのだが、よく

協力してもらっているのだ。

その彼女も、今回は自ら依頼に当たるところとなるのだろうか。

「依頼なんて久しぶりだなー、いつもは情報集めだけしかやってないから、困ったときは助けてね。」

イツキリさんはそう言って「5」のプレートが置いてある席に座った。

「あ～、口クサー、おっはよー。」

ヨツバさんが声をかけたその先には、たつた今ドアを開けて入ってきた口クサさんの姿があった。

「・・・」

口クサさんは、ヨツバさんを無視して、僕の隣の席に座った。それを見て、すかさずヨツバさんがちょっかいを出しにくる。

「おいおい～、なんか反応見せろよー、切ないな～。」

この二人とはよく一緒に依頼を受けるが、いつもこんな風にしていて兄弟のようだ。

口クサさんは、ヨツバさんと同等か、それ以上に端正な顔立ちをしている。

綺麗なブロンドの髪を少し長めに伸ばし、形が崩れていることはない。

瞳は蒼く、いつもスマートな眼鏡をかけている。見た目は外国人だが、日本語はわかるらしい。もつとも、無口なので、喋れるのかどうかはわからないのだか。

「・・・」

口クサさんは、頬をツンツンと突かれ、子守に疲れた母親のようなため息をひとつ吐き出した。

この一人は裏任務を専門的に受諾しているコンビのよつな存在で、情報屋としての力も確かだ。

ヨツバさんは人から情報を聞きだすのに長けているし、ロクサさんは音声や画像や映像を盗み撮りすることに長けている。この一人が揃えば、確かな証拠付きの情報が簡単に手に入ってしまうのだ。

「・・・・・」

なおも続く、ヨツバさんのちょっかいに何もできず、僕に助けを求める視線を送ってきた。ちょっかいの対象が僕に向いてもやっかいなだけなので、微笑んで「頑張つて」と目で伝えた。それを読み取ったのか、ロクサさんはまたため息をつく。

僕はロクサさんに、隠し撮りに便利な道具を発明して提供していることもあ、仲がいい。

そのことでたまに、ヨツバさんにちょっかい出されるのは困りものなのだが。

「お、みんなもう集まってるジャン！」

勢いよくドアを開けて入ってきたのは、サンヤヒータ、遅れてキュウだった。

「よし、全員揃ったみたいだね。」

最後に会議室に入ってきたキュウは全員がテーブルについているのを見てから自分の席についた。

「やっぱり、エイトはこないの〜？」

ヨツバさんが「4」と書いてあるプレートを手で弄びながら聞く。

「うん、情報堂に戻つてないから呼べなかつたし、ボスもエイトは遅れてくるつて・・・」

「

エイトとは僕たち情報堂のメンバーの一人で、天真爛漫な少女だ。重要な任務についているらしく、十日程情報堂には戻っていない。

「じゃあ、エイトもここにはくるのね。」

「つーことは、まちで全員召集なわけかよ、面白え。」

イツキリさんとサンヤはどこか楽しそうにそつ言つた。

全員召集という事実は、僕の心だけを高潮させているわけではないようだ。

「で、キュウちゃん、今日はなんの用なのー？」

ヨツバさんの口ぶりから、高潮は感じられないが、今回の依頼に期待を抱いているのは確かだ。

「知らない。僕もボスから「皆を集めろ」ってメール貰っただけだし。」

「ふーん、なんの用だらうねー。」

ヨツバさんがそう言つた後は、皆、次の依頼の内容を想像しているようだつた。

僕も例外ではなく、できれば、危険で、スリルがあつて、面白い依頼だといいなと思つていたりした。

各々が考え込んでから三三分程経つただろうか。

今まで静まり返っていた会議室に、メンバーの中で一番年長の一夕の声が響き渡つた。

「… 来た。」

その瞬間、会議室の空気が変わった。

耳が良い一夕は、ボスがいつも履いている白いブーツの音が、誰よりも速く聞こえてくるらしい。

そして数秒後、遠くのほうで、微かに音がしているのが聞こえた。
乾いたブーツの、カツカツという音だ。

依頼を受ける時、いつも聞くこの音。この音が大きくなるほど、溜め込んでいた期待が一気に放出されてオーラになる。情報屋としての、プロのオーラが湧き出てくる気がするのだ。

今回は全員召集とあって、期待も大きかつたから、オーラも迫力を増していくことだらけ。

ブーツの音がはつきりと耳に聞こえてきたかと思つと、最後に カツン といって音はやんだ。

会議室の金色のドアノブがゆっくりと回りはじめる。

その瞬間を待つていたかのように、ロクサさんがスッと立ち上がり、ドアの前に立つた。

ゆっくりとドアが開きはじめ、半分開いた所でロクサさんがボスの手を取る。

その姿はあるで、執事とお嬢様のようだ。

そして、そのお嬢様は、純白のワンピースに、薄いカーディガンを羽織った清楚な女性で、髪だけが、ただただ黒い。手には白いノートパソコンを持っている。

歳は不明、一見すると若く見えるが、もう数百年を生きた人間のような、妙に落ち着いた不思議な気配もある。

「みなさん、お待たせ致しました。」

ワンピースを少し揺らして、小さくお辞儀をしながら、ゆっくりと、か弱く纖細な声で囁いたこの人こそ僕達のボスであり、「情報堂」のオーナー、イチリさんだ。

プロローグ3

「それで、なんのようだよ。」

ヨツバさんの隣、「3」のプレートが置いてある場所に深く座り、足を組んでいるサンヤが、乱暴に聞く。

サンヤはじれったい事が嫌いらしく、早く依頼の内容を伝えてほしいといった様子だ。

「ボスに失礼だぞ。」

サンヤの隣、「2」のプレートの場所に礼儀正しく座る黒いスーツの男、ニータが前髪に隠れていないほうの目で軽く睨み、サンヤを制した。

「にい…でもよー、早くどんな依頼か知りたいし・・・」

「サンヤ」

ニータは更に睨みをきかせる。

それを見てサンヤはおとなしくなつた。

「失礼したな、ボス。」

「いいえ、大丈夫ですよ。」

デスクにつき、手に持つていたノートパソコンを起動させていたボスは、画面をみたまま微笑んだ。

ニータとサンヤは、情報堂創設の当初の頃から働いてるベテランだ。

サンヤは僕とそんなに年齢は変わらないが、どうやら小さい頃から居るらしい。

そんなわけで、最初の頃は、この一人で依頼をこなしてきたらしい。サンヤはニータの事を兄のように慕い、「にい」と呼んでいる。

ニータもサンヤのことを弟のように思っているようで、今のように制したりする、面倒見の良い兄貴分だ。

「口クサ、このコードをプロジェクトにつないで。」

「…。」

ボスの命令に静かに頷き微笑んだ口クサさんは言われたとおりに配線していく。

ボスはボスで、パソコンを操作しているようだ。

今までの依頼で、何度かプロジェクトを使った説明のような事があつたが、その大半が大きく複雑な事件だ。

「…」

繋げました、といふかの様に、口クサさんはボスに一礼した。

「ありがとう、座りなさい。」

ボスは笑顔で礼を言つと、口クサに座るよう促した。

「では…」

ボスは、口クサさんが座つた事を確認して、ゆっくりと話し出した。

全員の視線が、ボスのデスクの斜め後ろに降りてきた大きなスクリーンに当たられる。

すでに起動を終えたプロジェクターが音を立てて動き出した。

すぐに、プロジェクターからスクリーンへと画像が映された。

パソコンのデスクトップだ。中央の辺りにあるマウスカーソルはボスが操作しているものだ。

ボスは、スクリーンにデスクトップが表示されたのを確認すると、そのカーソルを、「情報堂」と書かれたファイルを持って行き、ダブルクリックした。

「まずは、これを見て下さい。」

そういつた後、スクリーンに写しだされたのは一枚の写真。

白い背景の中に、椅子に座った、制服姿の少女が居るだけの写真だ。真つ直ぐな栗色の髪の毛を胸まで伸ばしている、明らかに10代の少女。

小さい目は、少し垂れていて、眉毛も自信なさげに傾いている。口も小さく、無表情だ。

丸く小さな眼鏡が彼女の弱さを引き立てるかのようにかかっている。

第一印象は、「いじめられっこの図書委員」だ。

「かわいい女の子だねー。」

ヨツバさんがいち早く感想を言った。

「それで、この子がどうしたの?」

キュウが興味ありげに聞く。

「依頼人…ではなさそうだよな。」

サンヤも興味を示す。

僕も、この少女の顔に見覚えはないし、見たところ裏の世界の人間でもなさそうである。サンヤの言うとおり、こんな少女が依頼人だとは思えない。

第一この依頼の依頼人は誰だ？ いつもなら、最初に依頼人の名前を伝えられるはず・・・依頼したこともばれてはいけない様な人物なのかな？ だとすれば、この少女はいつたい何なのだろうか。様々な疑問が頭に浮かび上がっては仮説を立てるが、どれも納得いかない。

「Jの子は…」

唐突に、ボスがそう言つたので考えるのをやめた。
だが、次の一言でまた疑問が増えることになる。

この少女はいつたい何者なのか、それを知った僕の胸は今まで最高のスリルを味わつたような気分だった。

「”十番目”の候補です。」

もちろん、そう感じたのは、僕だけではないだろ？。

プロローグ4

「十番目！？」

一番過敏に反応したのは、キュウだった。

「こーんなにかわいい女の子が、ねえ…」

ヨツバさんもスクリーンに目を向けて呟いた。

「……」

ロクサさんも驚きを隠せず、スクリーンに与る少女を見つめ続ける。

「キュウくんの時も驚きましたけど…それ以上ですね。」

今まで黙り込んでいたイツキリさんも言つた。

「でも、ボス。なんでわざわざ全員集めて…キュウの時も携帯に与
真付きで知らせがきて、会ったのは伝達の時だつただろ？」

確かにそうだ。

キュウが入った時は、ボスからメールで知らされて、その日の依頼
伝達の時について紹介された。キュウだけじゃない。僕の時もそ
うだつたから、疑問に思つて当然だ。

そもそもここへはメンバーの紹介…つまりスカウトが無いと入
れないのでないのか？

僕もそうだつた、「一タにスカウトされてここへ「七番目」として
入つた。エイトはイツキリさんにスカウトされて八番目になつたし、
キュウはサンヤがスカウトして九番目になつた。僕が入る以前のメ
ンバーのことは詳しく知らないが、多分スカウトされたんだ。

「・・・あくまで、候補ですから。」

ボスが言うと、すかさずサンヤが反論する。

「候補？候補って何だよ。十番確定つてわけじゃないのか？なんで
スカウトする前に俺等に話す必要があるんだよ？」

おそらく頭が混乱しているのだろう、荒い口調になつてきたので、

ニータがいつものように田で制した。

それで、サンヤは大人しくなつたが、全員の頭の中の混乱は変わらないままだ。

「では、順に説明して行きます。皆さんはエイトが何の依頼についていたか知りませんよね。」

ボスは、空席となつてゐる僕の隣の席・・・「8」のプレートがおいてある席に田をやりながら言つた。僕もエイトの席を見やつて、言葉を返す。

「ええ、大事な依頼についていると聞いたくらいで・・・」

「エイトがなんだってんだよ。」

「エイトが依頼を達成したので、皆さんをここに呼びました。」

ボスの言葉を、頭の中でもう一度再生するが、意味がわからない。そもそも、エイトの依頼とは何だ？ エイトが依頼を達成したから僕たちが招集された？

「…なるほどー。」

察しの良いヨツバさんは、腕を組んで納得したように頷いた。

「ちんぶんかんぶんですよー。」

イツキリさんは、ヨツバさんに解説するよう促す。

ヨツバさんは、順序立てて、ひとつずつ解説していく。

「エイトって、人探しの依頼とか、よくやるでしょー。だから、いつも色んな所に行って、情報を集めてそれを提供してる。」

そこまで聞いて、ピンときたのか、サンヤが口を開いた。

「もしかして、エイトが留守にしてたのって、コイツを探してたのか！？」

そこまで聞くと、僕の中でもピンと来るものがあった。

エイトはこの少女を探していた、そして、この少女は十番田の候補だ。

十番目の候補を探す依頼なんて、誰がする？

・・・いや、一人いる。

「ボスが、エイトにこの子を探すよう依頼したってことだよ。」

ヨツバさんはボスのほうを見ると、ボスは黙つて頷いた。

「じゃあ、僕らを招集したのは、この子について、僕らにも手を貸してもらいたい事情が出てきたということですか。」

ボスは、僕の言葉にも無言で頷いた。

「なんか、特別な子みたいだねー。」

「なるほど、俺等を呼んだ理由はわかつたけど、俺等に手を貸してもらいたいほどの事情って何だよ。」

サンヤがそう言つと、ボスは壁にかけてある時計に目をやつて、「その事については、彼女に説明してもらつたほうが早いですね。」といった。

「彼女・・・ってエイトのことですか？」

そういうつたイツキリさんの言葉を遮る様にして、会議室のドアが大きな音を立てて開いた。

「お待たせしましたっす！――！」

部屋に入ってきたのは、短い髪の毛を一つに縛りあげた、背の低い少女。

赤いミニスカートの下から長く黒いスパッツを履いて、寒くなつてきたというのに半そでの蒼いプリントTシャツを着ている。

背中に背負うリュックサックは派手な黄色をしていて、三原色がひとつにまとまつたような不思議な格好だ。

「あ、エイトだー。」

ヨツバさんはヒラヒラと手を振る。そう、この少女こそ、エイトだ。

「みなさん、久しぶりっす！」

拳を上に突き上げて答えたエイトはすぐにボスに向き直り、小さく礼をして話はじめた。

「皆さん知つての通り、私はこの子を探して3ヶ月間の旅に出でいたつす！しかも、その依頼主が…」

「ボス、だろ？もう解りきつてるつ。」

勿体振つた会話に飽きてきたのか、サンヤが口を挟む。

「そう！そして、私は見事任務を達成したつす…！」

エイトは胸を張つて、自慢げに話した。

ヨツバさんはパチパチと拍手し、言った。

「でー、なんでボスはこの子を探してたのかなー？」

「探していたというより、少々問題があつたので、私が身辺調査をしてたつす。」

「身辺調査？ただ探してただけじゃないのかよ。」

サンヤがそう言つた後、エイトはボスをちらりとみやり、頷く仕種をした。

するとボスがパソコンを操作し、スクリーンに写真がスライドショ－のように次々と写しだされた。

「この写真は…？？」

一見、街の風景を撮つた写真で、沢山の人人が写つっていたり、学校の写真だつたり、高級住宅街の写真だつたりした。

「この子に関係のある建物や通学路つす。」

確かに、建物の写真はどれも、図書館や学校、駅など、あの少女が行きそうな場所ばかりだが…

「…！」

「今の写真…！？」

ロクサさんとヨツバさんが、同時に立ち上がつたかと思えば、二人とも顔を合わせて頷きあつてゐる。

ボスは、スライドショーを一旦止め、ヨツバさん達が反応を示した写真を映し出した。

「住宅街の写真ですね…」

「でつけ一家ばつかだな！」

イツキリさんとキュウが写真を凝視しながらいうが、大きな家ばかりというだけで、特に変わっている箇所はない。

「あ…れ？この家、どこかで…」

それまで写真を眺めていたサンヤが急に声をあげ、写真の中央に写つていてる一際大きな家を指差した。

「！…まさか…」

それを見て二ータも思い当たることがあったようだ。

「思い出したつすか？まあ、裏任務をしたことのあるあなたたち4人なら、わかるつすよね？？」

「うん、忘れるわけないでしょー、一応お得意様…だしー。」

「…色んな意味で、な。」

裏任務…表沙汰にできない組織や団体からの依頼の事で、大抵は小さな組の権力争いなんかの依頼だ。しかし、時たま大きな組からの依頼が入る。

以前は二ータやサンヤがそれらもこなしていたそうだが、今はヨツバさんとロクサさんが専門的に受諾しているものだ。危険が多い任務で、限られた人しか受諾できない。

「つまり、組織関係つてことですか…？」

エイトに問い合わせるとあっさり答えが返ってきた。

「そうつす。この家はこの少女の家。そして…」

エイトが次の言葉を発する前に、二ータが重々しく言った。

「暴力団、長谷川組の組長の家だ。」

プロローグ5

「長谷川組…？」

表だつた事の情報収集を専門としているイツキリさんは、よくわかつていないうようだが、長谷川組の名がでた途端、部屋の空気が凍りついたのは確かだ。

「長谷川組って言つのは、俺達によく依頼してくる組織でね、簡単に言つちゃうと、暴力団なんだよ。常に内部はピリピリしてて、毎週他の組と抗争してるの。」

「そのたびに、俺らが狩り出されてたわけだ。迷惑つちや、迷惑だな。」

ヨツバさんとサンヤが説明するが、一人とも深刻な表情で、ヨツバさんは、「仕事の顔」をしていた。

長谷川組のことは、ヨツバさんと一緒に任務についてた事があるから僕も知っているが、この家がその組長の家だとこいつとまでは知らなかつた。

軽い裏任務を専門とするキュウも耳にした事があるだらう。

「長谷川組、色々な事やつてるから、稼ぎがあるみたいでさ、依頼料金も羽振りがいいし、組長は、一ーンな家に住んでるしね。」

確かに、組長が住んでるといふ家は高級そうな住宅の立ち並ぶ住宅街でも、一際目を引く大きさだ。

頭が少し冷静を取り戻したところで、ハツと気づいた。

長谷川組の組長の家がなんである少女に関係しているのだろうか…・僕の疑問は二ータの次の言葉で解決された。

「…長谷川の、娘か。」

「そういう事つす。だから危険性はないか色々調べてたつす。」

「なるほどねー。」

ヨツバさんが納得したように頷いたかと思つとすぐ顔を上げて、パソコンを操作しているボスのほうを見た。

「でもー、なんでそんな女の子を情報堂にスカウトしようとしてるのかなー、ボス？」

ヨツバさんの言葉に、パソコンの作業を一旦止めたボスが顔をあげた。

「まだ声かけてないんでしょ？ 危険性あつたら声かけないて事だよね？ でも、危険因子かもしれない子を候補にするなんてさー‥‥なんかあつたでしょ？」

ヨツバさんの相手の心の内を読むかのような口調でスラスラと並べられた言葉に、ボスは黙つたままだった。

「言いにくい…もしくは、言えないか。」

サンヤがボスの表情から察した。

「理由については、私も説明されてないつす。」

「私達にも言えない、理由：か。」

イツキリさんが寂しそうに呟くと、ボスが口をひらいた。

「今日、全員に集まつてもらつたのは長谷川組の娘の身辺調査について皆さんにも協力して貰いたいからです。」

「ヒイトが調べたんじゃないのか？」

キュウがエイトを指差しながら言つと、エイトが首を横に振つた。
「私だけじゃ、危険性があるかどうか、はつきりわからなかつたつす。」

「…見た所、危険性なんてなさそうだけだなー…。」

キュウの言葉に、一同は頷く。

すると、ボスが口を開いて深刻そうに話しあじめた。

「危険性…というのは、彼女自信の事だけじゃなく、彼女を取り巻く人々が、長谷川組と関わっているかどうか…それを彼女が知っているのかどうか…」

取り巻く人々、とは 友達や知り合いの事だろうか。 そこまで徹底するとなると、相当本気なのだろう。

「だから…各方面から調べて欲しいのです。：なるべく早く。」

ボスは決意したような顔を僕達に向ける。

「…ボスにそこまで言われたら、ねえ、口クサー。」

「…」

口クサさんはヨツバさんに領きで返す。

「私も！あまり役に立たないかもしねないけど…」

「アツキが一般人なら、イツキリの網にかかるだろ。ま、輸入ドラッグとか、マズイ系のヤツなら、俺の網にかかるな。そっち方面は任せてくれ。」

イツキリさんとサンヤも自分の専門分野で情報収集するようだ。

「若い長谷川組の下つ端なら、お得意様だ！あの子と接点ないか、探つてみるよ！」

「私も引き続き彼女の身辺調査を続けるつす！」

キュウも、エイトも、それぞれ協力に同意した。

もちろん、僕も協力する。

「ボスに頼まれたら、やるしかないでしょ。僕もネットで探ります。

「…」

「俺もやろう。」

二ータがそう言って、満場一致で協力することにきました。

ボスは安心したように微笑み、席を立つて一礼した。

「ありがとう、皆さん。」

同日午前七時三十分 情報堂ナナセの部屋

部屋に戻つてすぐ、デスクにある黒いデスクトップパソコンの電源をつけた。

早速、長谷川組についてリサーチするためだ。

「長谷川組」と。

まずは、長谷川組について調べなければ、と思い、検索欄に打ち込んだ。

一番上に出てきたのは、「長谷川組って?」というものだ。
質問サイトに投稿されたものらしく、クリックすると有名な質問サイトが表示された。質問内容の下に回答がいくつかあったので、取りあえず一通り読む事にした。

Q・長谷川組ってどういった組ですか?ちょっと名前を聞いて、気になつたので、教えて下さい!

A・長谷川組は、その方面じゃ有名な暴力団です。表向きには画商をしていますが、かなり大きな組で、裏では麻薬取引をしているらしいんですね。

怖い組なので、あまり首を突っ込まないほうがいいですよ。

「画商か…」

そこまで読んで、気になるワードがてきたので、あとで調べようつと思いつ、側にあつたメモ帳に書いておいた。

そして、続きを読み始めた所で、部屋のドアがノックされた。

「はい?」

椅子に座つたままひづれつと、イシキリさんガ「コーヒーを持って入

つてきた。

「イツキリさん。」

「お疲れ様。」

彼女は笑いながら僕にコーヒーをさしだす。

「あ、ありがとうございます。」

「どういたしまして。…早速調べてるの?」

パソコンの画面に表示されたページをみながら聞かれる。

「はい。まだはじめたばかりですけど。取りあえず、長谷川組について。」

そう言うとイツキリさんは不思議そうな顔をした。

「それなら、ヨツバさんやロクサさんに聞けばよかったですのに。」

僕は困り顔で笑つてかえす。

「そうしたかったんですが、一人ともすぐ出でつたので…」

それを聞いて、イツキリさんは「あっ、そつか。」という顔をした。

「イツキリさんは、いいんですか?」

「え、どうして?」

「いや、情報収集行がなくていいのかなーと思つて。」

そう聞くと、イツキリさんはまた少し笑つて返した。

「まだ朝早いし、今から言つても皆、通勤通学ラッシュだし、危ない系なら、夜のほうがいいかなって。」

「なるほど。でも、無理しないでくださいね、危ない系ならヨツバさん達に任せた方がいいですよ。」

そう言って、僕はまたパソコンに向き直り、先程の続きをから読みはじめる。

「ま、私みたいな素人が出る幕じやないのはわかってるんだけどさ・

・初めての裏任務?だから、役に立ちたくってさ。」

イツキリさんはパソコンに向かっている僕に声だけ投げかける。

僕もページを読み続けながら言葉を返す。

「向上心があつていですね。僕なんかいつもみたいにこつやつてネットからしか情報を掴めない。情報屋失格ですよね本当。」

「そんなことないよ。ナナセ君はす」「こじやない。ロクサさんのメカニックでしょ？」

「まあ、便利な機械を提供したり、情報のデータを整理したり、自分で分なりにやることはやってますけどね。」

そういつた後で、気になる回答が田に入つた。

A・普段は長谷川画商として活動してゐる組だよ。でも裏では怖い事してゐるみたい。

一応、長谷川画商のHP載せます。

このサイトは普通のサイトだけど、長谷川組にはあまり関わらないほうが多いよ。

「ホームページ？」

添付されていたURLをクリックすると、それらしいホームページが表示された。

トップには「長谷川画商」と書いてあり、普通のホームページとなんら変わらない内容のとなつていた。

「長谷川画商って、例の組と関係あるの？」

イツキリさんが興味津々に聞いてくるので、ホームページを適当に散策しながら答える。

「暴力団は大抵画商とか、骨董品屋とか経営していますよ。怪しまれることなく大金を取引できるし、一般人からは相当搾り取れますからね。」

そこまで聞いて、恐ろしくなつたのかイツキリさんは表情をこわばらせた。

「日本にもそういう場所があつたんだね。皆から話は聞いてたけど実感わいてきた・・・。」

トップページの右上に、「当店へのアクセス」とあつたので、クリックすると、地図と住所が表示された。

「新宿、か。」

メモ帳に、住所と簡単な地図を書いて小さく折りたたみ、それをイツキリさんに渡した。

イツキリさんは一瞬何事かと思ったようで目を丸くしたが、メモを開くと僕の意図がわかつたようだつた。

「ここが、長谷川さんの巣窟ってこと？」

「巣窟・・・といふか、支部って感じですかね。危険かもしれませんがイツキリさんが適任だと思うんです。」

僕の言葉に、彼女はまたキヨトンとした顔を見せた。

「ヨツバさんやロクサさんは長谷川の人達に顔を知られてるから危険かもしれません。でもイツキリさんなら一般人だと思い込んでくれると思うんです。」

「一般人・・・まあ、確かにヨツバ君やロクサさんに任せると私はのほうが安心かもね。」

「はい。ボスは特に言つてませんでしたが、長谷川にこの依頼の存在を知られると厄介なのは確かですから。」

僕がそういうと、イツキリさんはメモ帳を大事に折りたたんでポケットにしまった。

「そういうことなら、頼ばれしてない私にお任せ！」

彼女は少々の不安を顔に浮かべていたが、嬉しそうに部屋を出て行つた。

同日午前八時十五分 新宿区学園前通り

「んー、見つからないねえ」

ヨツバが欠伸をしながら暇そうに足をのばす。
ボスからの任務で 取りあえず エイトからもらつた情報・彼女の
通学路だといふ、この小道を張つていたのだが、八時になつても現
れない。

小道といつても、大通りから少し離れているというだけで建物は大
通りと変わらないが人通りは少ない。

「もしかしてー、相当早い登校のかなー。」

人通りが少ないとはいえ、男一人がただ道をブラブラしているのは、
あまりに怪しいと思い、こうして近くの公園のベンチに座つている
わけだが…

「暇ー」

この男…ヨツバは、暇そうに座つてているだけで、ベンチからも見え
る通学路を見ようともしない。

…本当に彼女を探す気があるのか？

もつとも、本気で探すなら直接学校に押しかければ、一番手っ取り
早いが素性を明かせない身なのでできるはずもない。

「口クサも暇だよねー」

突然話を振られたので、取りあえず頷いて返す。

「よつし、じゃ、別の場所行く？」

これ以上待つていても来る気配は無いし、別の方で情報収集して
いくほうが、よっぽど効率的だ。

そう考えて、ヨツバに向かつて頷く。

「じゃ、ノビノビタイムしゅーりょ。」

お前はいつもノビノビしているがな。

心の中でそう言って、ヨツバの後に立ち上がった。

「あー。」

ヨツバは少し歩いて立ち止まり、気の抜けた声を発した。

何事かとヨツバの指差す先を見ると、小道を歩く女子学生がいた。

「…制服同じだけどー、佑乃ちゃんじやないねえ」

佑乃といつのは、今回のターゲット。つまり、長谷川組 組長の娘の名前だ。

これもエイトから教えてもらつた情報なのだが。

道をゆっくりと歩いている少女は、写真で長谷川が着ていた制服に似ているが、着崩れがひどく、スカートも長谷川佑乃の写真より短いため、一見わからない。

「んー、取りあえず話聞いてみる?」

相当派手な格好で、しかも遅刻寸前の時間にタラタラと歩いているということは、相当グレている気はするが、まともに話を聞ける自信はあった。

「よし、いつものよつ、作戦決行!」

ヨツバの合図で走りだし、少女がいま通つて行つた小道に着くと後ろからゆっくりと追いかけて行く。

少女のスピードが遅かったので、すぐに追いつけた。

手を伸ばせば届く距離に来た所で、ヨツバが笑顔で目配せしてきたのを合図に作戦開始。

「君ー、ちょーといいかな?」

ヨツバが少女の肩に手を乗せると、少女が首だけをこぎらに向ける。少女がヨツバに気をとられている隙を見て、素早く少女の前に移動し進行方向に立ち塞がつた。

「なに？私急いでんの！」

予想通り、ヨツバの手を振り払った少女は前に向き直るが、進行方向を塞がれている事に気付いて立ち止まる。

「なつ、なに？なんなのよ！」

逃げられてしまう前にヨツバがもう一度声をかける。

「急いでるんなら、もっと早く歩けばいいのにー。」

「関係ないでしょ！」

「まーまー。少し質問するだけだから、ね？」

ヨツバが笑いながらそういうと、大抵の女性は言われるままになつてしまふのだが、この少女も例外ではなかつた。

少し照れて俯き、耳を赤くして、

「早く、ね！」

と、先程より穏やかに言つた。

それを聞いた後、コートのポケットに入っているボイスレコーダーの録音ボタンを押して、会話を見守つた。

「ありがとー、君の学校に、長谷川佑乃ちゃんて子、いるかなー？」

少女は少し考えた後、思いだしたように顔を上げた。

「ああ、いるいる。」

少女がうんうんと頷いている隙に、ヨツバはこじり田田を向けてきた。

こちらも、コクンと頷いて返す。

「どんな子なのか、教えてくれない？」

同日午前八時四十一分 東京都某空港 第一待合ロビー

空港の中央ゲートには、スーツケースをもつたサラリーマンがちらほらいるだけで、長期休暇ほどの賑わいは感じられない。

平日だから当たり前なのが、こういう時は居座りにくらい。定期的に巡回にくる警備員に睨まれるのは慣れているが、声をかけられると面倒だ。

サンヤは少し警戒しつつ、待合ロビーの目立たない隅っこのソファに座っていた。

「ふう…来るわけないって。」

長時間座っていることにさえ疲れを感じて、一度立ち上がり自販機に向かう。

大体、世間一般じゃ、今は勉学に励む時間帯だ。

あんな、普通の女子高生が空港にいるなんてありえない。
そう考えながら、自販機に金をいれ、いつものボタンをおす。
出てきたオレンジジュースを手に取ると、すぐに飲み干した。

「ふーっ」

一息着いた所で、待合室に戻ろうとしたが、戻っても暇なだけだと思いつまらない程度にブラブラすることにした。

出張にいくのか、サラリーマン風の男が小さめのキャリーバックを持つて、国内線の受付に向かっていく。
それ以外も国内線受付に向かう者が多く、国際線受付は閑散としていた。

平日の空港は寂しいもので、海外に向かう者も、帰つて来る者も少なく、ぱっとしない。

「…あー、暇だ。」

最近は面白い情報も無いし、海外からくる大御所も無いので、売る情報もなければ買う依頼人もいない。

「…そもそも、俺の本業は夏休みとか、冬休みとか、ゴールデンウイークなんだよなー。ホントに、平日は違う所行こうかねー。」

と、独り言を呟くが、俺は知っている。

こういう平和すぎる場所には、思わずビックニュースが紛れているものだ。

すると、調度目の前に見えてきた到着ゲートの電光板が、せわしく光りはじめた。

飛行機が到着した合図だ。

「韓国からの到着便か…」

電光板に書いてあるその名前を見て何か感じるものがあった。長年ここに居座っているのだ、勘が働いたのかもしれない。

ビックニュースの予感だ。

おもむろに、到着ゲートのすぐ側の自販機で、迷うふりをして様子を伺う。

暫くしてから人が出てきた。

人数は少なく、ほとんどがサラリーマン風の男だ。

「…ハズレか？」

そう思い、ため息をつきかけたが、すんでの所で止まった。

(今の…)

黒いスーツケースを持ち、黒いハットを深く被つた若い男。サラリーマンばかりの乗客のなかでは少し浮いた格好だが、存在感がまるでなく霧のような雰囲気。

自らそういうような、そういう違和感があった。

(なんだ…?)

堅気では、なさそだが、危険な臭いはない。そう見せてるだけか?

ともあれ、暇を持て余すサンヤには恰好の玩具だ。

男は足速に中央出口に向かつた。後から注意して尾行する。

そして車の停留所に暫く居たが、一台の黒い外車が来てそれに乗り込んだ。

「新宿ナンバー、な 十五の四十六・・・と

男が車に乗つて走り去つた後、車のナンバーを手にメモした。

そしてすぐに携帯を取り出し、人目に着かない場所で電話をかけた。

ワンコール、ツーコール、

なかなかでないがいつもの事だ。

『もーしもーし?』

よつやく出たと思ったら、欠伸した後のような、氣の抜けた声が聞こえてきた。

「キュウか?サンヤだ。」

『どうしたの?』

「新宿ナンバー、な 十五の四十六。このナンバーに覚えないか?」

キュウは記憶力が良く、細かい事を良く覚えている。

その能力をかつて、情報堂にスカウトしたのは、俺だ。

『あ、永地組の幹部の車だね。黒い外車でしょ?』

「永地組…! ? まちかよ…!」

『え、どうしたの、サンヤ?』

「おい、永地に若い男の幹部なんていたか?」

キュウは、少し間をあけて、

『永地組の幹部つて、みんなおじさんだと思つたけど…』

『なるほど…サンキュー。じゃ、』

そのまま電話を切ろうとしたがキュウに引き留められた。

『ちょ、おい! まさか、永地の車が空港にあつたの?』

「ああ。」

『でも、今回の事には関係ないかも…』

確かに、関係はないかもしない。

新しい幹部が韓国から帰国したというだけの事かもしない。……だ

か……

「もし、関係あるなら……面白こよな。」

同日午前八時三十一分 情報堂会議室

人が出払った会議室には、イチリと二ータだけが残っていた。
二人は向かい合う形で座っている。

壁のほうを見やり、何か心配そうに一点を見つめ続けるイチリに対して、二ータはいつものような厳格な態度を捨て、古き良き友人として話しかけた。

「で、なにを心配してんだ。ボス。」

暫く続いた沈黙を破った二ータは、私に優しく問い合わせた。
「やつぱり、二ータにはばれてしまいますね。」

私は笑つて答えるが、答えになつていなければ自分でもわかる。私のその態度を、「答えたくない」と受けとったのか、二ータはデスクに頬杖をついて、拗ねたようにそっぽ向いた。

そして、そのままの体勢で言つ。

「あいつらの事を心配してるなら、らしくねえな。あいつらはそんなにヤワじやねえ。心配するだけ損だぞ。」
確かに私はいま心配している。

だが、それは情報堂のメンバーに対してではない。

二ータが言うように、彼らは心配されるほど弱くないし、なにより私は彼らを信じている。

私が心配しているのは、別の事だ。

「彼らの事は心配していませんよ。」

二ータにはそれだけ伝えるが、やはり何か隠している事はわかつたようでまた拗ねてしまった。

「ごめんなさい、今は言えないの。」

フォローのつもりで言ったのだが、逆にカチンとさせてしまったよ

うだ。

「今は、なら、いつか言えよ。」

そう言って拗ねる様子は、子供のようだ、彼の姿勢とは正反対だ。

「フフフ…」

それがなんだかおかしくて、笑ってしまった。

そのすぐ後に、静かな会議室に微かな振動音が聞こえてきた。デスクに立てかけてある携帯をみやるが、なにも変化はない。どうやら私の携帯ではないようだと思つと、二ータがジャケットの内ポケットから携帯を取り出した。

「おっと、サンヤからだ。」

そう呟いた後立ち上がり、部屋の隅に移動してから電話にでた。

「ああ、サンヤ、どうした。」

離れた私の場所からも微かに聞こえるほどの声が、電話口から聞こえてきた。

「おい、落ち着け、デカすぎて聞こえねえよ。」

相当大きな声だったのか、二ータは電話を耳から少し離して会話を続けた。

サンヤが大きな声で電話してくるときは、危険な状況におかれている時か、何か面白い情報を入手した時だ。

二ータの様子から察するに、何か面白い情報を入手したのだと思われるが：

サンヤの『面白い』は、いつも厄介事なのだ。

「ああ！？そりゃ本当か！」

突然上がった二ータの大声に、ただならぬ予感を感じて思わず立ち上がつてしまつた。

「ああ…わかつた、伝えておく。」

二ータは最後にそつとだけ言つて電話を切つた。

「どうしたの？」

携帯をしまいながら戻つてくる二一タに、立ち上がつたまま問うと、手で「座れ」と促された。

私が座つたのを確認し、自分も座ると真剣な眼差しで話し始めた。

「サンヤが空港で永地の車を見た。」

永地。

その言葉に、嫌な予感を感じた。

永地組とは、長谷川組と同じく暴力団の組織で、敵組にスパイを送り込むことで得た情報を使い利益を奪つ、そちらでは珍しい頭脳派な組織だ。

「関係はないかも知れないが、ついこの間、長谷川の画商から莫大な売り上げ金が盗まれただる。もしかしたらって考えると、こりや大抗争の予感だよな。長谷川佑乃と組の関係にも関わつてたら面白いつて、サンヤは言つてるが…。」

二一タはそこまで言つて、一息つき、私の反応をうかがつた。

「…」

私は特に言葉を返すでもなく、沈黙を押し通していたが内心では心配が膨らんでいた。

「…なるほどな。」

私の反応に、何かを感じたようで口元に笑みを浮かべた二一タは確信したように言った。

「ボスが心配してたのは、長谷川佑乃だつたか。」

表情を読まれた事にドキッとしてしまい、それが逆に証拠となつてしまつた。

ばれてしまつた以上、隠す事もないと思い開き直つて言つた。

「さすがですね、二一タ。」

同日午前九時三十分 新宿 私立速水女子高等学園

ホームルームが終わり、一時限目の準備に追われる生徒達。皆、いち早く準備を終えて一分でも学習の時間を伸ばそうとしている。

というのも、定期テストが近づいているからだ。

東京新宿区の裏通りにある、私立速水女子高等学園は有名な私立校で、幼小中高大とオールエスカレートのエリート学校だ。そのため学習能力も他校に比べると桁違いで、教育方針も無論厳しく、生徒は常に追い詰められているようなストレスを感じていることだろう。

有名な私立校だとの間に派手な格好をしたギャルや、授業を平気でサボつたりする生徒がちらほら見かけられるのはそのせいだ。入学当初は成績優秀で、模範生徒だった者がそういう具合にグレルことも、珍しくはないという。

ただ、親が権力者だつたり金持ちだつたりするので、退学や停学処分になることはまずなく、野放し状態だ。

一部の真面目な生徒の間では恐れられている存在・・・その一人が、相葉奈津である。

相葉奈津は授業の準備をするそぶりも見せず、里沙、喜美、麻矢、ひなと一緒に階段の踊り場でたむろしていた。

「はー、まぢありえねー、八代。」

ひなは怠そうに不満を吐き出す。

八代とは、里沙と私のクラスの担任で、ハゲで臭くてキモいじじいだ。

「ちょっと遅刻しただけなのに、べびべびしき……」

ひなはさらに付け足した。

八代は話しが長い事で有名だ。

ここにいる五人は皆、遅刻の常習犯で、遅刻するたびに門で待ち構える八代に説教を喰らう。

「つか、いーかげんなれたつつの」

里沙は笑いながらひなに言う。

それに続いて私も言った。

「ま、ひなは転校してきてまだ日が浅いしーしょーがなくね？」それを聞いたひなは笑つて、「確かに」とだけ言った。

会話がひとくぎりついた所で、麻矢が新しい話題をふつてきた。

「てかさ、奈津、今日なんか上機嫌だよねー、なんかあつたの？」

麻矢は私の腕を、肘で突つついた。

「あ、わかるうー？」

頬に手を添えて、わざとらしく乙女なポーズを取つた。

「そーいや、教室に入つて来る時も、妙に一コ二コしてたねー。」

里沙も肘で腰のあたりをぐりぐりといじる。

それがくすぐつたくて少し笑いながら、話しを始めた。

「フフ…、あのね、今朝登校中に、超絶イケメンな二人組に、声かけられちゃつてさーつ…！」

イケメン、という単語に、喜美が目敏く反応する。

「まじ！？ナンパ？！」

羨ましそうに言う姿に、少し鼻が高くなるが、あれがナンパでないことはわかっている。

「ナンパつづーか：人探してたみたいで、ウチのガツコに居るかー、て聞かれた。」

ナンパではないとわかると、喜美は一気にテンションを下げた。

「なんだ、ナンパじゃないのか。」

しかし、今度は麻矢が興味を示したようで、深く聞いてきた。

「誰、誰？誰を探してたの！？」

ひなや里沙も興味しんしんと言った様子だったので、一部始終話す事にした。

「なんかさー、いつもの道歩いてたら、いきなり声掛けられて、最初は無視しようとしたんだけど、もう一人が道塞いでるし、よくみたら一人ともイケメンだしで、話し聞いたわけ。んーと誰だつたかなー、やっぱ、今朝の事なのに覚えてない…はせ…？はせ…？」
誰だつたかなーと、記憶を巡らすが全くでてこない。

その人物について聞かれて、私は答えたはずなのだが。

「長谷川佑乃？」

「あー、そうそうー長谷川佑乃！ひな、よくわかつたね！！」

私がひなの答えに驚くと、麻矢はすぐに呆れた口調で言った。

「忘れんの早っ、つか、長谷川佑乃ってこの間ひなが話してた奴じやないの？」

麻矢の言葉に、ひなは頷きながら言った。

「そーそ。あいつ。でもなんで聞いてきたわけ？」

ひなは少し不安そうに顔を曇らせていた。

「さあ、どんな子なのか教えてつてゆーから、テキトーに…」

「なんて答えたの？！」

ひなが鋭く睨みをきかせた顔でそう迫ってきて、少し怯みながらも答える。

「い、いや、暗くて目立たない奴とだけ…」

「あの事は？聞かれたの？…」

「あ、あの事？？」

ひながなんの事を言つているのかわからず、助けを求めるように麻矢のほうに目をやつた。

「まぢ！？覚えてないの？…ありえん…ひな、奈津はあの事覚えてないっぽい。多分言つてないし、聞かれてもないんじゃない？」

「…そか、よかつた。」

「奈津、まぢ覚えてないの？あの事。」

「…うん。」

あの事?なんだつたか記憶に無い…。

長谷川佑乃と、ひな…あれ、なんだつたかなー…。

…あ、ああ!

「あー!思い出した!!!!」

私があの事について思い出すと、ひなは大きくため息をついた。

「はあー、たく、まあ、今回は忘れてくれてよかつたけどー。」

「確かに。そのイケメン達にうつかり口を滑らせてたら、ヤバいしね。」

「でも、なんで長谷川佑乃の事聞いてきたんだるーね。」

「んー、わかんないけど…」

ひなは少し考えてから、その場に居た全員に向かい直って、言った。

「皆、長谷川佑乃の事聞かれたら、とりあえず知らないって言つと
いてね。あいつの家かなりの金持ちだから、親が調べさせてんのか
も、探偵とかに。」

「OK、わかった。」

麻矢の同意に、全員が頷いた。

「それと…」

ひなは、何かを決意するような目で私達一人一人に目を配つてから、
周りに聞こえないようにか、小さくボソッとした呟いた。

ひとつ短い文章を私達に伝えると、いつもの中身に戻つて、

「…じゃあ、早速今日から。」

とだけ告げ、立ち上がりそのまま階段を上つていつてしまつた。

残された私達は、お互い顔を見合つて不気味に笑いあう。

「面白そうだね、おもいつきしやろー!」

喜美の言葉に、全員が頷いた。

同日午後五時四分 新宿 私立速水女子高等学園前通り

朝、登校中の女子高生から長谷川佑乃の情報を聞き出してから、エイトから貰った情報を頼りに図書館や喫茶店などをあたつてみたが、それらしい情報は手に入らなかつた。

女子高生に使つたような聞き込み方法は公共でするには目立つので控えたが、ヨツバはナンパするような感覚で聞き込みをしていた。結局わかつたのは、喫茶店「ラフィネ」の常連だということ、毎週土曜は図書館に来て一日中本を読んでいるということしかわからなかつた。

そして、今は長谷川佑乃が通つているという私立学校の正面口がよく見える道路の端に、待ち合わせしている風を装つて張り込みしていた。

「エイトの情報だと、部活はしてなくて、帰りに図書室掃除して帰るらしいよ。」

そういうヨツバの目元には、仮面舞踏会を思わせるピンク色の派手な仮面がかけられていた。

その仮面は彼の黒を基調としたスマートなファッショニに妙に合つていて、一言で言えば、奇妙だった。

極力目に入らないように心がけるが、どうしても目についてしまうその格好を、なぜ張り込んでいる今する必要があるのか、まったくの謎である。

「あ、あれあれ、あの子じゃない？」

ヨツバが指で示した先には、栗色の髪が特徴的な少女が、重い足ど

りで正面口から出てきていた。

「綺麗な髪だねー、母親のいいとこどりだよねー。あの子に長谷川の血が流れてるなんて、思えないよ。」

そうか、長谷川の妻はイギリス人だった。

元々秘書として雇っていたそうだが、長谷川が相当気に入り結婚までこぎつけたという。

妻のほうは金目当てだつたらしく、娘が生まれてすぐに離婚した。長谷川は性根の腐つた悪党だが、妻はブロンンドの美女だつたらしい。

しばらくの間、長谷川佑乃を目で追つて、背中を見せた頃合いを見計らつて尾行を開始した。

怪しまれないように、少し離れた所からゆっくりと追つていく。

彼女の後ろ姿はどこか淋しげだが、何かあつたのだろうか。

時々フラツと身体が傾いて危なっかしい。

曲がり角に差し掛かつたとき、彼女が急に倒れこんだ。

どうやら曲がってきた人と衝突したようだ。ぶつかってきた者は、何も言わずに走り去つて行く。

悲劇のヒロイン様な長谷川佑乃の姿に女好きの血が騒いだのか、彼女が倒れ込む寸前から走り出して、いち早く彼女の元に駆け寄つていたのは他でもないヨツバだ。

「大丈夫だつたー？」

ヨツバの後を追うとそこには俯いたまま顔をあげない長谷川佑乃がいた。

「怪我はしてないねー、よかつた。それにしても…最近の人は優しくないよねー。」

ヨツバは走り去つて行く小さな背中を見つめていった。

「あれ？あの子どうかで見たことあるような…。」

急にキヨトンとしてそう言つたヨツバがそう言つたので確認してみたが、既にその人物は姿を消していた。

「ありがとうございました…」

消える様な細い声だつた。

彼女はスッと顔を上げ、ヨツバをみた。

その直後に、彼女の感謝の目は疑惑の目に変わつたであらうことだが、見て取れた。

「あ、あなたたち、なんですか…」

理由は主にヨツバの仮面だ。

彼女は少し怯えるようにそう聞くと、即座に立ち上がつた。

「あー、驚かしちゃつたねー、僕ら潔しい者じゃないよ、情報じ、うぼーー?」

その先を言いそになつたヨツバの口を手で押さえ込んだ。

危うく捜査対象に素性を知られる所だつた。

美女を前にすると要らぬ所まで話してしまうのが、ヨツバの悪い癖だ。

「情報…どう?」

長谷川佑乃是目を丸くしていた。

このままでは色々と勘違いされそつだったので、とっさにメモ帳を取り出して、文字を書いていく。

『情報屋の依頼でこの辺りを調査していた所だ。この辺で白い猫を見なかつたか?』

怪しまれないように、猫探しという当たり障りのない嘘をついて見せた。

長谷川佑乃是フルフルと首を振つて、最後に一礼して足早に去つていつた。

「あーあ、いつちゃた。」

自分のせいだと思つてもいよいよ小さな口ぶりに少し呆れたような目線を送る。

しかし本人は全く気にしてないようで、

「んー、佑乃ちゃんは家に帰ったみたいだし、今日の調査は終わりかなー。」

そう言って大きく伸びをして、歩き出した。

「お腹すいたー。今日はどこで食べようかー。」

辺りを見回して食事の出来る所を探すが、裏通りのど真ん中にそんな場所があるはずも無く、来た道を引き返そうとするが、ポケットの辺りに振動を感じて足を止めた。

振動の正体は携帯だった。

「ん?メールかな?」

ヨツバの携帯にも届いていたようで、同時にメールを確認した。

短い文章を確認して顔を上げると、ヨツバは和やかな笑みを浮かべていた。

「たまには自分で賑やかに…だね。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3949z/>

情報堂事件簿～暴力団と文学少女～

2011年12月17日19時47分発行